

【野分】のわき

野分とは南太平洋で発生し北上してきた台風(熱帯低気圧)のこと。「のわき」とも「のわけ」とも読みます。

初嵐が陰暦七月末から八月の夏の嵐であるのに対し、野分は九月からの嵐をいいます。勿論、秋の季語に属します。

秋風はことのほか言葉の種類が豊富のようです。雅語には金風・西風・涼風・素風・雁渡しなどがあり、被害を及ぼす風には・浦風・やませ・はやち・初嵐・などがあります。全国の漁師言葉や農民言葉を含めると更に豊富になるでしょう。

紫式部『源氏物語』巻二十八の巻名は「野分」です。光源氏三十六歳八月。長男夕霧十五歳。仲秋の頃、六条院では野分のために丹精の草花が被害を受けました。源氏に伴い見舞に訪れた夕霧は紫の上の美しさに心を奪われます。夕霧は六条院に住む女性たち中宮、明石の君、玉鬘、花散里と父源氏との関わりを垣間見、おとなの世界を知るといった内容です。

紫の上を垣間見て揺れ動く少年の心を野分に喩え巻名にしたのではと思えてなりません。

・野分する野辺のけしきを見渡せば心なき人あらじとぞ思ふ『千載集』藤原季通

・野分せし小野の草ぶしあれはててみ山に深きさをしかの声 『新古今集』寂蓮

このように古くから歌語となっていますが、作物や建物に被害を及ぼす野分が王朝文学の中でなぜ雅語として扱われたのでしょうか。私のこの疑問にヒントを与えてくれたのが清少納言です。

・野分のまたの日こそ、いみじうあはれに、をかしけれ。『枕草子』百九十一より

この段は風の様子を綴った前段を受けて野分が去った後、格子の目に木の葉が綺麗に吹き寄せられている様子は激しい嵐のしわざとも思えぬと述べています。

『新古今集』『玉葉集』などにも野分が去った後の静かな情景が詠まれています。

農家では二百十日を野分がくる厄日としたようですが、京の都は盆地ですので、強力な台風に襲われることは稀です。貴族たちにとって野分来襲は定めとしてあきらめられる一過性の難であり、過ぎ去った後のさわやかさを愛でて雅語となったのではないのでしょうか。野分跡・野分晴という言葉も歳時記に見えます。